13

鉄の自給を達成し大和朝廷を支えた

近江国 瀬田丘陵の古代製鉄遺跡群

ー野路小野山遺跡・木瓜原遺跡ほかー

古代大和勢力を支えた琵琶湖南岸の大製鉄地帯

瀬田川両岸の南郷・瀬田丘陵に広がる古代製鉄遺跡群

京都から滋賀県との境に連なる京都東山･逢坂山の峰々を越えて大津に入りると左手には比叡･比良の山々を背に琵琶湖が広がり､右手には湖南アルプスをはじめとした勢田丘陵が続く。

琵琶湖とこの湖南アルプスから鈴鹿へと続く山々の間には広大な近江平野が広がるが､大津はその入口部にあたる｡北に大きく扇形に広がる琵琶湖は大津の東瀬田で上記した南に延びる湖南アルプスなどの丘陵地と京都東山連峰にはさまれた谷間を瀬田川となって南郷・宇治・大阪へ流れ下って行く。この瀬田川の東側から南東には広大な丘陵地が東西に延々と続き、その背後には笠置・信楽・鈴鹿の山々がさらに続いている。

この丘陵地と琵琶湖の間には大津・瀬田を入口に広大な近江平野が続く。この大津・瀬田から草津・野洲へと連なる平野部は琵琶湖を交易路として畿内と大陸並びに日本海沿岸・東国を結ぶ古代から開けた要衝の地で、大陸・朝鮮半島など新しい文化流入の地である。そしてこの瀬田川東岸の瀬田丘陵地と対岸を含めた南郷地区は古代の製鉄遺跡が点在し、7 世紀後半から 8 世紀にかけての古墳時代から飛鳥時代・奈良時代にかけての古代畿内の大製鉄地帯だったと考えられている。

これらの南郷・瀬田丘陵地の製鉄遺跡の特徴は吉備の国と共に大陸・朝鮮半島で行われてきた鉄鉱石精練であり、他の地域が日本で改良された砂鉄精練であるのと大きく異なっている。

日本における精練・製鉄の始りは 5 世紀後半ないしは 6 世紀初頭　鉄鉱石精練法として大陸朝鮮から技術移転されたといわれ、吉備千引かなくろ谷遺跡等が日本で製鉄が行われたとの確認が取れる初期の製鉄遺跡と言われている。

大陸・朝鮮で砂鉄精練が行われていたとの実証はなく(最近朝鮮で大量の砂鉄が鍛冶工房と一緒に見つかった例がでてきた)砂鉄精練は日本で大きく改良発展したと考えられているが、この時代の製鉄炉として砂鉄精練の痕跡を残す製鉄遺跡も数多多く発見されている。この南郷・瀬田丘陵で発掘された製鉄遺跡群は、日本での製鉄開始時期からは 100 年程度後の飛鳥時代の製鉄遺跡ではあるが、日本に最初に伝来した初期の製鉄法がそのまま踏襲されてき、それが大和勢力と密接に関係する吉備と　この近江の国のみであると考えると鉄器文化先進の地北九州と朝鮮の結びつきを圧して　大和・吉備の勢力が朝鮮の新しい勢力と組み鉄の覇権を握って日本統一を成し遂げたと考えるのもあながち乱暴ではなかろう。

　それ以後大和勢力は丹後・出雲などの砂鉄精練技術をもつ諸国をもが従えて行くが、日本統一の原動力となった近江の鉄鉱石精練技術がそのまま痕跡として受け継がれてきたのではないか・・・

　古代近江は琵琶湖を通じた交易の要衝としての重要性が強く指摘されているが、この近江の鉄の生産国としての重要性も認識せねばならない。

古代天智天皇の近江の宮　聖武天皇の信楽宮　そして雄略天皇の越の国からの大和入場もすべてこの近江の鉄を舞台にまわったのではないか・・・?

1. 滋 賀 県 の 古 代 製 鉄 遺 跡

滋賀県で確認されている　古代　製鉄遺跡一覧　(7~9 世紀)

1、太平遺跡	大津市石山寺辺町	27、小荒路遺跡	高島郡マキノ町小荒路
2、平津池ノ下遺跡	大津市平津一丁目	28、天神社裏山 A 遺跡	高島郡マキノ町海津
3、南郷遺跡	大津市南郷一丁目	29、海津 B 遺跡	高島郡マキノ町海津
4、芋谷南遺跡	大津市南郷四丁目	30、白谷遺跡	高島郡マキノ町白谷
5、山口遺跡	大津市南郷五丁目	31、北牧野 A 遺跡	高島郡マキノ町牧野
6、青江遺跡	大津市神領三丁目	32、北牧野 C 遺跡	高島郡マキノ町牧野
7、青江南遺跡	大津市神領四丁目	33、北牧野 D 遺跡	高島郡マキノ町牧野
8、月輪南流遺跡	大津市月輪三丁目	34、北牧野 E 遺跡	高島郡マキノ町牧野
9、源内峠遺跡	大津市瀬田南大萱町	35、大谷川遺跡	高島郡マキノ町牧野
10、関ノ津東遺跡	大津市関津三丁目	36、谷八幡遺跡	高島郡今津町梅原
11、小山池遺跡	大津市関津六丁目	37、東谷遺跡	高島郡今津町大供
12、大塚遺跡	大津市上田上中野町	38、酒波遺跡	高島郡今津町酒波
13、藤尾遺跡	大津市藤尾奥町	39、木津遺跡	高島郡新旭町饗庭
14、大野遺跡	大津市真野大野一丁目	40、鵜川遺跡	高島郡高島町鵜川
15、木瓜原遺跡	草津市野路町	41、明神遺跡	高島郡高島町鵜川
16、湧済谷遺跡	草津市野路町	42、山田地蔵谷遺跡	滋賀郡志賀町北小松
17、金鉄落遺跡	草津市野路町	43、賤山北川遺跡	滋賀郡志賀町北小松
18、野路小野山遺跡	草津市野路町	44、滝山遺跡	滋賀郡志賀町北小松
19、キドラ遺跡	彦根市中山町	45、オクビ山遺跡	滋賀郡志賀町北小松
20、古橋東遺跡	伊香郡木之本町古橋	46、念仏山弁天神社遺跡	滋賀郡志賀町南小松
21、黒山 A 遺跡	伊香郡西浅井町黒山	47、谷ノ口遺跡	滋賀郡志賀町南小松
22、黒山 B 遺跡	伊香郡西浅井町黒山	48、後山畦倉遺跡	滋賀郡志賀町北比良
23、ひくれ谷遺跡	伊香郡西浅井町小山	49、天神山金糞峠入口遺跡	滋賀郡志賀町南比良
24、小山 A 遺跡	伊香郡西浅井郡小山	50、タタラ谷遺跡	滋賀郡志賀町小野
25、小山 B 遺跡	伊香郡西浅井町小山	51、金刀比羅神社遺跡	滋賀郡志賀町守山
26、大浦 A 遺跡	伊香郡西浅井町庄	52、二口遺跡	滋賀郡志賀町

滋賀県教育委員会ホームページ　<埋もれた文化財の話>　「近江の鉄と鋼」より

上記一覧表は滋賀県埋蔵文化財センターで作成された古代 7 世紀～9 世紀の滋賀県製鉄遺跡の一覧表でその分布がきわめて特徴的で 3 地域に分けられることです。

1. 大津市から草津市にかけて位置する瀬田丘陵北面（瀬田川西岸を含む)、
2. 西浅井町、マキノ町、今津町にかけて位置する 野坂山地山麓、
3. 高島町から志賀町にかけて位置する比良山脈山麓

このうち、野坂山地と比良山脈からは、磁鉄鉱が産出するので、その鉄鉱石を使用して現地で製鉄していたと考えられる。

特に野坂山地の磁鉄鉱は、『続日本紀』天平宝字 6 年（762）2 月 25 日条に、「大師藤原恵美朝臣押勝に、近江国の浅井・高島二郡の鉄穴各一処を賜う」との記載があり、浅井郡・高島郡の鉄穴に相当するものと考えられ、全国的にも高品質の鉄鉱石であったことが知られます。

一方、瀬田丘陵近辺では、現在のところ磁鉄鉱の産出は知られておらず、この地での製鉄は、原料の鉄鉱石をどこからか運んできて生産したと考えられ、規模が大きく、かつ古代では例のない防湿施設をもつ木瓜原遺跡の製鉄炉や、6 基の製鉄炉を整然と配置し、高品位の鉄鉱石を使用している野路小野山遺跡の製鉄炉などを考えるとこの瀬田丘陵での製鉄は律令国家がかかわる官営工房の可能性が高い。

そこで注目されるのが、『続日本紀』天平 14 年（743）12 月 17 日条の「近江の国司をして、有勢の家の専ら鉄穴を貪り、貧賤の民の採り用い得ぬことを禁断せしむ」という記述です。これによると、近江国で、有力な官人・貴族たちが、公民を使役して私的に製鉄を行っていたというのです。その場所がどこで、7～9 世紀にかけて、瀬田丘陵を中心に近江国の各地で製鉄生産が行われていたことは、律令国家成立期において近江国が政治的・経済的にきわめて重要な位置を占めていたことを示しています。

2. 瀬田丘陵　古代製鉄群を訪ねる

草津市　野路小野山製鉄遺跡・木瓜原（ボケバラ）遺跡

3月23日京都から草津市の野路小野山製鉄遺跡など古代　大和政権成立の黎明の時代に極めて重要な役割をはたしたといわれる瀬田丘陵の古代製鉄遺跡群を訪ねた。

3月13日国立歴史民俗博物館で開催された「加耶の鉄と倭」の国際シンポジュームで古代日本誕生の黎明期に大和連合のバックボーンとして鉄自給の使命を担ってさっそうと登場した近江の国琵琶湖南岸の鉄鉱石精練の話を聞いた。

比叡ドライブウエイ　山中越え　　琵琶湖から瀬田丘陵

近江が鉄の国であることは司馬遼太郎の「街道を行く」等で知ってはいたもののそれはむしろ大陸と関係して湖北・比良山麓と考えていたので話を聞いてビックリ。

余知らなかったが、かつてよく通った南郷・瀬田の瀬田川沿いの丘陵地　最近　龍谷大学の理工立命館大学の理工が進出したあの瀬田丘陵に古代の大規模な製鉄遺跡群があるという。資料も予備知識も全く無し。

でもあの丘陵地に続く近江平野は縄文・弥生の時代から開け、渡来人も多く住んだ古代の文化先進地。また　丘陵の奥にはかつて古代に都が造営された信楽があり、鈴鹿から笠置の峰々へ。またこの山間をぬけると飛鳥・奈良へと古代の道が続いている。

古代製鉄遺跡群のある瀬田丘陵の位置

さっそく地図と地名を頼りにまず一番解りやすそうな草津市野路小野山製鉄遺跡を訪ねる事にした。
京都から滋賀へ抜けるルートは幾つかあり、大動脈である国道１号線・名神高速道は京都から山科を抜け逢坂山を越えてゆく。また　京都の街の北から比叡山の南側を越える山中越えや比叡山の北を越える途中越えの道がある。京都から琵琶湖へ抜け、琵琶湖と山々との間の狭い平地に広がる大津の街を街道が抜けて行く。琵琶湖が瀬田・淀川として南に流れ出す口にかけられた近江大橋を渡り草津にはいる。
大阪からだともう少し南側　国道１号線を瀬田の唐橋で瀬田川を渡り草津へ。
JR南草津駅のところで国道1号線を右に曲がる。

面真近かに幾重にも重なって住宅が立ち並ぶ丘陵が東西にのびている。瀬田丘陵である。約 500m ばかり進んでこの丘陵地にさしかかるところが京滋バイパスの野路中央のインター。このバイパスを越えたところに小野山団地のバス停があり、野路小野山製鉄遺跡もほぼこのあたりであるが、全くみあたらず。街の人たちに聞くが誰も要領を得ず。

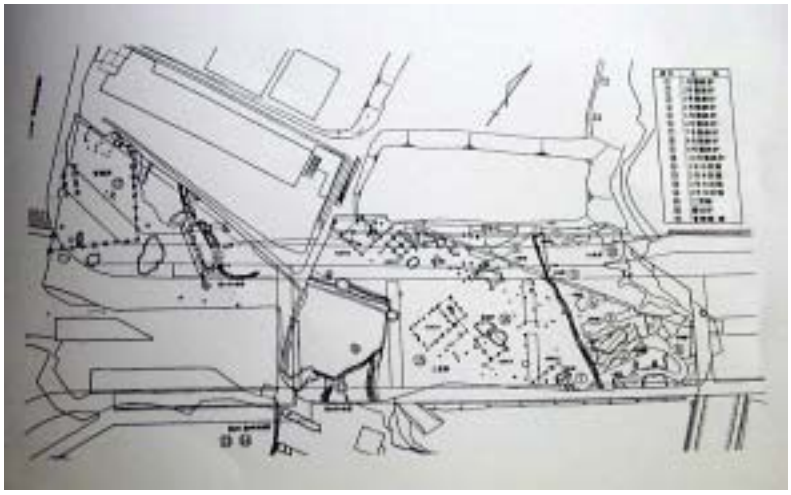
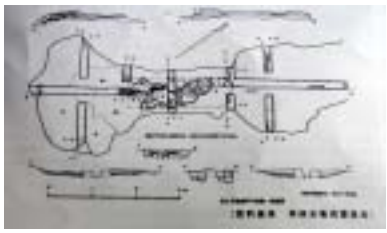
国道１号線　京滋バイパス　草津市野路中央インター交差点付近
南西から延びる瀬田丘陵の北側の山裾　この道路の下に野路小野山遺跡がある

さらに丘陵地を少し登って行くと立命館大の正面の入口。もう一度引き返し、団地の中をうろうろするが解らず。通りがかりのお爺さんが「バイバスの直ぐ北側のところだ」と教えてくれるがやっぱり何も無し。近所をウロウロ約 30 分。　近くに草津玉川公民館を見つけそこで話をしてやっと所在が解った。「インターそのものが小野山遺跡。約 10m ばかし土盛をせず橋になっているその下が遺跡」と教えてもらう。また「立命館大学正面のはいったところのグランドの下が木瓜原製鉄遺跡。ここは発掘跡が保存されているが、グランドの下なので事前に申し込んで扉を開けてもらわないとダメたろう」と。
「街の中　街として開発される中での遺跡の保存がいかに難しいか　う・・・・ん」とうなってしまった。

京滋バイパス　野路中央インターの橋脚の下にある野路小野山製鉄遺跡

この京滋バイパスの国道の下には下記のような 7 世紀末から 8 世紀半ばにかけての長方形の箱型製鉄炉 11 基・木炭窯 6 基・鍛冶工房とみられる掘建て柱建物など製鉄に関する一連の大製鉄遺跡遺構がまとまって眠っている。
一度調査後、埋め戻された遺跡は平成 12 度にパイパス下を中心に再度部分的に掘り起こされ、保存状態の確認が行われた。

〔滋賀埋文ニュース　第 253 号より〕

野路小野山遺跡概要と発掘された製鉄炉　　野路小野山遺跡発掘調査概報より

京滋バイパスの野路中央の交差点の直ぐ東側約 10m の幅で土盛のない橋になっていましたが、暗い橋の下です。調査は終わっているとは言いながら厳しいと感じました。

木瓜原製鉄遺跡が地下に保存された草津キャンパス　グラウンド
立命館大　草津市

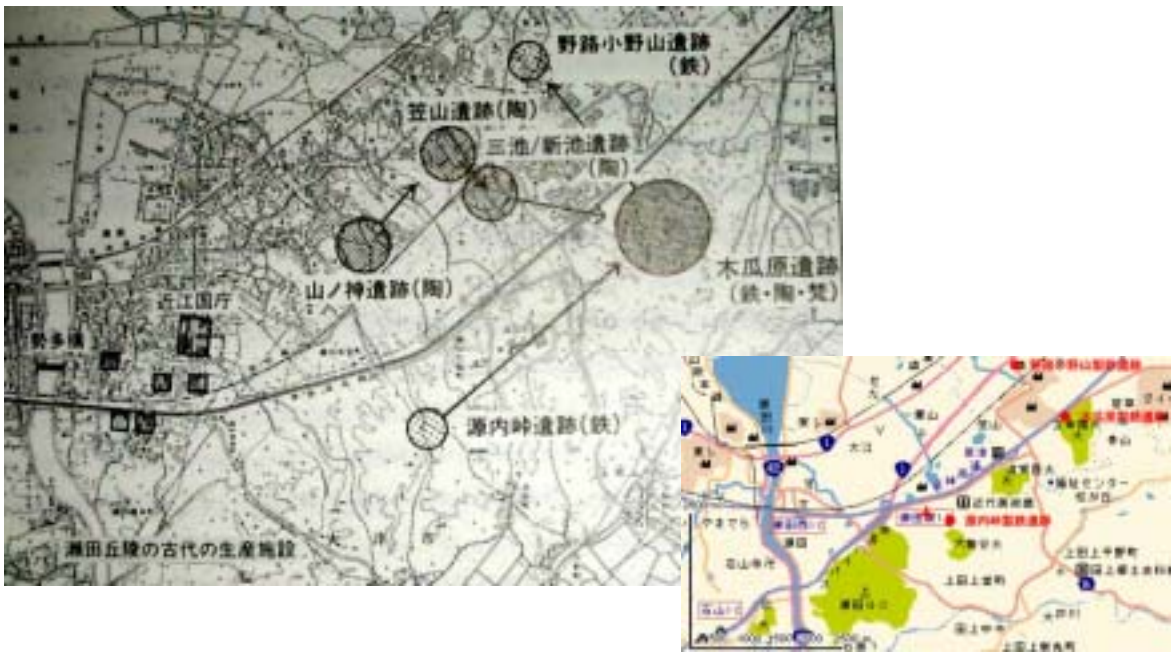
立命館大もやっぱり土曜日でダメでした。
この南郷･瀬田の丘陵地は交通の要衝として　また京都・大阪のベッドタウンとて有無を言わさず開発の進んだんだところ。
古代から多くの渡来人がこの地で日本の人たちと一緒になって　鉄の自給に命をかけて取組みそれらが原動、力となって　次第に大和政権から日本律令国家へ

古墳時代から飛鳥・奈良の時代へと移っていく。この南郷・瀬田丘陵の製鉄遺跡と日本誕生のドラマ　また、近江平野で発掘される数々の古代遺跡。近江の国の位置付けを考えるとこの地に総合的な古代博物館があっても良い地域ではないかと思うのですが・・・・・。

今は住宅地開発の中に完全に埋もれてしまった瀬田丘陵。古代日本形成の重要な役割を担った畿内屈指の鉄の大生産地。眼前に広がる琵琶湖を眺めながら京都に山越えするとこの地の重要性が実感としてわかってくる。

大津市南郷・瀬田地区　龍谷大のある丘陵　今滋賀県文化財センター等がたちならんでいるが、この地も源内峠製鉄遺跡や桜峠遺跡など古代製鉄遺跡が発掘されている。このあたりも住宅地。きっちり遺跡がのこっているのだろうか?

源内峠製鉄遺跡はこの瀬田丘陵で発掘された一番古い遺跡と言う。



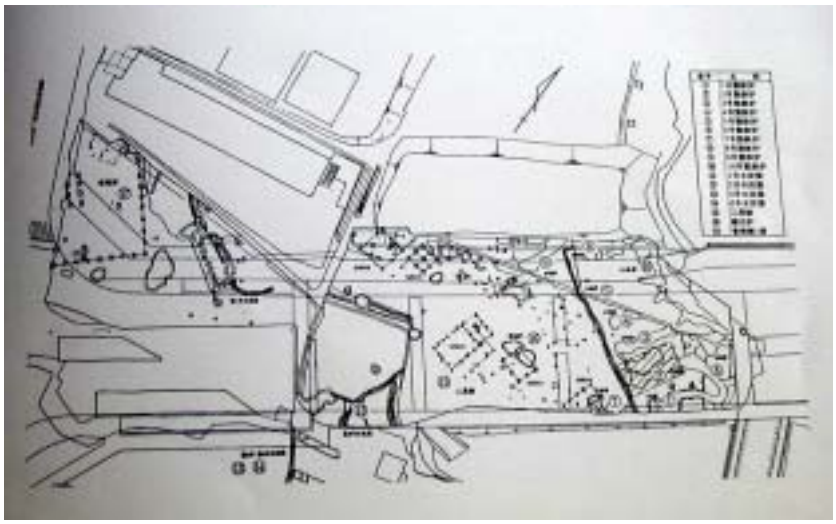
●　草津市　野路小野山製鉄遺跡

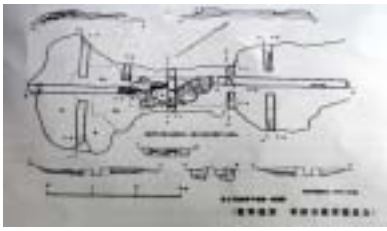
野路小野山製鉄遺跡は、市内野路町字小野山に所在する遺跡で、京滋バイパス建設に伴う発掘調査によって製鉄炉 11 基、木炭窯６基、 大鍛冶跡、工房跡などが発見された。
この遺跡のある瀬田丘陵には、他にも木瓜原（ぼけわら）遺跡、観音堂遺跡、源内峠遺跡など多くの製鉄遺跡が集中し、飛鳥時代 から奈良時代にかけての国内でも有数の製鉄地帯である。
瀬田丘陵の製鉄遺跡群の中では、野路小野山製鉄遺跡が最も新しい段階の遺跡と考えられ、操業の中心は８世紀なかば頃奈良時代の遺跡と推定されている。それ以前の遺跡では、１基から数基の大型製鉄炉を用いて鉄が生産されていたが、野路小野山製鉄遺跡で は、やや小型の製鉄炉を６基並べて操業していたことがわかっている。これは、熱効率のよい小型の製鉄炉を用いて良質の鉄を多量 に生産することを目的としたためと考えられています。

小野山遺跡製鉄路跡

小野山遺跡復元模型

［天平の都　紫香楽］刊行委員会発行　滋賀県信楽町　ホームページより



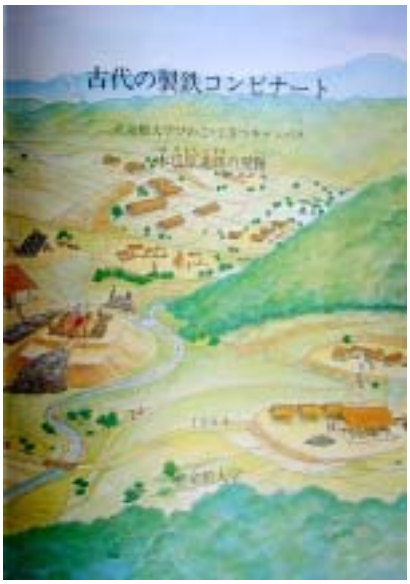


野路小野山遺跡概要と発掘された製鉄炉　野路小野山遺跡発掘調査概報より

製鉄原料として使われた鉄鉱石の一例

さらに、ここから出土している鉄鉱石は、他遺跡のものと比べて極めて良質で、近隣では採集されないものであり、また、その鉄鉱石 を分割する方法についても、高度な技術が用いられていたといわれています。これらのことから、野路小野山製鉄遺跡は、当時の最新 の技術を用いて作られた製鉄所であったと考えることができる。
このように遠隔地から良質の原料を集め、最新の技術を導入することができたのは、一地方勢力の力だけでは困難であり、背後に大きな力。この頃中央では聖武天皇の時代で、唐の文物制度を採用し、国政を充実させていました。野路小野山の地に作られた製鉄所は、中央の権力と深く関わりがあったと考えることができます。

● 草津市　木瓜原製鉄遺跡　（立命館大ホームページより）



木瓜原（ぼけわら）遺跡は、七世紀末から八世紀初頭までの製鉄遺跡。立命館大学　草津キャンパスの建設に先立ち 1990 年から 1992 年にかけ発掘調査され、7 世紀末から 8 世紀初めにかけての貴重な製鉄遺跡である事が判明。 現在、立命館大学の草津キャンパスのグラウンド地下に発掘された状態のままに保存されている。
この遺跡は箱型の製鉄炉と鍛冶場　木炭炉・須恵器窯・梵鐘の鋳造場など多岐にわたる生産施設が配置されたコンビナートの様相を呈する大規模な遺跡である。また　製鉄炉は他地域の同時代の製鉄炉と比べて格段に大きく(2.8x0.6m) 地下防湿近構造も丁寧で近江の中心的製鉄所であったと考えられる。

この木瓜原遺跡の概要については『「古代の製鉄コンビナート」立命館大学びわこ・くさつキャンパス　木瓜原遺跡の発掘』1994 年　立命館大学の小冊子にわかりやすくまとめられている。

木瓜原遺跡の製鉄炉遺構　『「古代の製鉄コンビナート」木瓜原遺跡の発掘』より

●　大津市瀬田　源内峠製鉄遺跡　龍谷大学　安食氏ホームページより

源内峠製鉄遺跡　発掘風景　　安食真城氏ホームページより

源内峠遺跡の発掘報告を伝える　　源内峠遺跡で発掘された製鉄炉　　滋賀埋文ニュース　第 221 号より
　滋賀埋文ニュース　第 221 号

源内峠遺跡は龍谷大学瀬田学舎（大津市瀬田大江町横谷）のすぐ近く。 昭和 52・60 年度の 2 度にわたる調査で遺跡は７世紀後半の製鉄炉跡で瀬田丘陵一帯では最古の遺跡である可能性があり、鉄鉱石精練が行われた箱形の 4 つの製鉄炉が発見された。調査後現地は埋め戻され現地保存の処置が取られているという。
まだ、自分で現地に立つ事できていませんが、龍谷大学の安食真城氏がホームページで発掘の時の様子を紹介されており、また安食氏並びに滋賀県埋蔵文化材センターの藤崎高志氏より貴重な資料を送っていただいたので、その中から遺跡の様子を紹介する。
あたりには鉄粉が８０センチから１メートルも体積しており、約２０～３０トン程度あるとみられることから、 この地で長期間にわたって作業が繰り返されたと推測されている。
古くから地道があり、鉄粉が多く見られたことから、以前からこの場に遺跡があるのでは ないかと思われていた。龍谷大学開学時に道路をつけるに当たり調査をして遺跡の存在が確認された。
７世紀　藤原京、大津京、紫香楽京などの造営に大量の鉄が使われたのではないかと考えられている。

7 世紀後半は朝鮮半島白村江での敗戦・百済の滅亡・新羅の朝鮮半島統一と朝鮮半島との関係で国際緊張が高まり、朝鮮半島からの交易も思うに任せず、大和朝廷にとって　この源内峠製鉄遺跡等南郷・瀬田丘陵での鉄生産・自給が極めて重要な時であったと考えられ、その後この瀬田丘陵で次々と大規模な官営と見られる製鉄基地が営まれ、律令国家形成のバックボーンとして機能する。

4. 製鉄技術伝来と大陸・朝鮮から伸びる鉄の道

古墳時代中期　4 世紀から 5 世紀にかけて朝鮮の加耶が鉄素材の供給基地として成長そこから鉄　の形で大量に輸入された鉄は日本国内で数々の工具・武器・武具に鍛冶加工されて用いられた。日本では鉄素材の供給を加耶を中心とした朝鮮に頼らざるを得ず、国内諸勢力は朝鮮諸国との鉄供給をめぐる連携を進める一方、技術移転をベースに鉄自給の道が模索されてきた。この時期　中国・朝鮮も戦乱の時代であり、高句麗が勢力を伸ばし、南下してくると百済のみならず加耶諸国も圧迫され、鉄の供給も逼迫し、供給基地も変化する。　また、新羅が順次勢力を伸ばし、6 世紀半ばには加耶がほろぶ。このような 5～7 世紀にかけての朝鮮半島の混乱は日本の諸国にも大きな影響を与え、鉄の覇権をめぐって朝鮮諸国との連携や大量の渡来人の流入が生じる中、北九州や大和連合等諸国が対立し、百済と結び鉄の覇権を握った大和が次第に日本諸国を統合して日本骨格を作ってゆく。 また、大和は同時に渡来人の技術をいち早く吸収し、鉄の自給についても、早くから大規模精錬を開始し、この鉄の力をもって諸国を統一し、7 世紀初頭には律令国家を作り上げ、飛鳥・奈良時代を作ってゆく。大和朝廷の勢力の源泉となったのが、朝鮮からの鉄の移入と同時にこの瀬田丘陵での鉄自給と考えられている。
日本での鉄の生産は 5 世紀末から 6 世紀初頭まで遡れると言われているが、この近江の国瀬田丘陵ではおそらく渡来人のもたらした技術による鉄鉱石による鉄精錬が 7 世紀にはスタートしている。
他の地域がやっと鉄鉱石の代替原料として砂鉄を見つけ。これを用いた効率・品質でも劣る鉄精錬を開始している時にこの瀬田丘陵では大和国営の大規模な鉄生産がおこなわれ、次々と勢力を伸ばしていったと推定される。
まさに古墳から飛鳥・奈良時代にかけての日本骨格の誕生には朝鮮の鉄を巡る戦いそして日本での鉄自給の戦いが重要な役割を演じており、大和から朝鮮半島への幾重もの『Iron Road 和鉄の道』があり、近江の国はその重要な中心地として栄えたと考えられる。
この大和の繁栄を支えたのはこの近江国瀬田丘陵の鉄・吉備国の鉄であり、その後　これに丹後や越の国の鉄が加わり、蝦夷地征伐の 8 世紀には今の福島県原町金沢地区の行方の製鉄基地が加わって行く。

鉄の自給を達成し　大和朝廷を支えた「近江国 瀬田丘陵の古代製鉄遺跡群」
ー野路小野山遺跡・木瓜原遺跡ほかー
【完】